

報仇

繪本四季物語

前篇

四

913.5
工
前篇 4

報仇四季物語前編卷之四

東都

振鷺亭主人

著

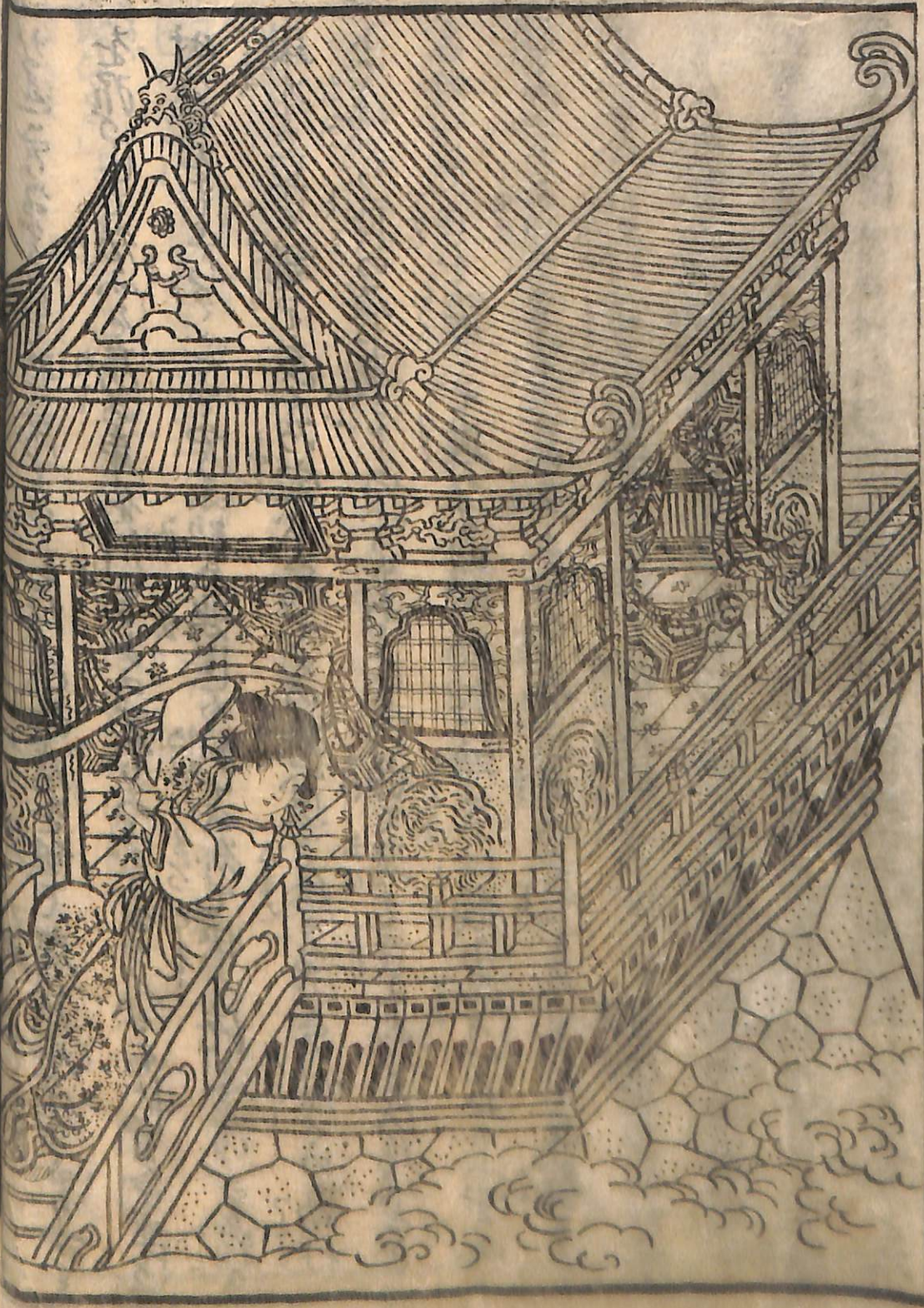
第七齣

松風僂人十覽臺亦奇現す
路江御料鎌倉山は操を耀せ

さても路に馬のよま細らま八九の強盜馬に丸圍まう荊棘蔭蔭と
推分は路をたれふぞ玉甲りり老よ又を先ハ白雲横らり夢深じて
日影を人ぞ嶮志さ暮よ登り合れり或ハ怖しき岨とつひ又ハ水洶々と
激く碧潭方糸川を且り休は只今鬼きゆるむら乃心地と物情
去き可小いさね田面老松森々とて廣木の間を漏るる霧ひやか
降る背冷身を墜て是をふ以處ハ救百丈の巖石縁てても翔うたき

光景めて此小大さるる洞穴あつて蒼苔深なる又穴の四を小袂の連環と
 執事たる鳴子あり絨きこま交束心して待たる所も少刻ありて羨霞乃
 真も一箇の老女束苜を懸て携へ出まらぬ路に此老女をさるる巖六平
 あつて此顔の白髪をよぶらぬをさるる所所の局わきたる狂扮るる所ち
 賊等も向く大美のはやまらぬ六絨等ハ路にを引はして何れもさるる
 彼老女ハ路に薄を舞に乃雲をさるる其も次接て伴の岩窟の中へ入る
 借洞の只接して偃僕て入る不さなるは小穴の奥ハ闊して左右まを
 有壁ありそ中の道一筋岩石次繋るる一町まもも園穴たのどくま
 遠まこさるる出まらぬ清奇典麗るる地方小のりて不思後や樓門宮
 殿たつらありて宛を僊境の空ま入る心地さるる川路に又の老女ハ
 此とよして樓門を進入も小梅の河木桂の棟香木を聚るる金玉次
 鏤るる殿宇後間ともなくしてを真小のり處に彼老女ハ路に小向て去る

此小待中にも高奥深くま入る此路にさるる花をいふ形人の
 色様多し深山幽谷小殿造をへはもんとく山絨などの隙あつては
 山神小魅さらぬを和らむとて誦まきりうまくと尚心怖まきまはあつて
 予もままは小振閣小造るるまを揚ありと乃周塔上まで朱の欄杆を
 了路にハ出廻廊を昇るともなくして後頂ふまや見えは十覽見臺と
 以金榜をさるる此書室といふハ萱雜て空に峙てとく地より湯又似る金の
 陽珠の初七寶嚴具飾りて花を州本を畫て五彩彰る施せり又と乃
 風景を眺るる凡洞庭西湖松竹多深を園まありて壺中も山川
 天席も二粒の粟の中も日月を養へる神仙の術ありとそをそれる路にハ
 いさく怪まらるるハ小まいへるまは此ら臺閣水石遊蕩の美を擅する



生肉を將酒よのころを執一命を懐中ニ元やとて佐言を放てぞ中なる六

老女大ひよ喜びて之物をてとの東ハ安堵あじとて尚又是れをなき情由

或一々ひひ含るるに此時路に定候を突ちひひ今ハ記さるるとおひけり

と精神を激し心腹を硬し几帳の信はありて衣帯を解て言肌にある

羅の勝衣を彼て單の襦衣のを帯なるがあくそや肌膚をこぼし一五六

のあり乃は様ごふ思ふを教よそらくと溢るる洞推拭くは生動賢

およる心地して親も彼老女にもふもきて帳巻凍くぞ進るまごぞ主乃

後ふと遣きみ至るる路にふふ心狂と股懐ひ小膝を物てたたと伏と

とせご心の申ふ思ひるる大摩王いころお変まかく人を怪し饒劇いるとまや

とまじ二高をあきてておまじ一個の道人一脚の方持ふ任おるを齡の行い針お

似さる身ハ金蟬の羽衣を穿その様異形不思議ありて又物勝るくを日を

州附の老女ハ路に自らを執て倚の傍より衝遣て退きぬ路にその態を羞

らひてたの自ら両乳伏匿し右の自らも下以抑覆くは俯き跪れは彼

乃人完尔して路江を見ゆがわめて一粒の香を拵し相々と打擲て去推ま山歩

たよを行向をぬ人跡後方山中にける光景こそ不審小思ひはらわ我ハ先

神氣を養ふ長生の乃士はて元も色小係念は只你がその臓る漏精と

求て嚙んがぶ小你を以處ふ招きうと乃東故とのハ我懐を後一道を觀

九箒の丹經と學びて三真の術曰明は方成傳るがゆ小をく穀食を存元

を氣成吸て長生不死の藥ををともる其丹藥成煉る方とのハ九々ハ

十一人乃婦女の精液をのりておまじ成能石を煉て丸とるまこま成真玉丸

と名づきてたよ服業に仙家小秘法する而るを親も婦女の精液と採め

九十八人向んとす。今日你をたて九々の救全申すはまは姑もろこび小僧もろ
 だ。你快く我意ふねて薬方相ふおめて六連又その西坂の方に送帰とどろ
 什麼このと怖き事なやんと只顧路に相を野眺川ておらんやも
 ど路にの冷ぢう身毛いよもて怖しう流るを吃心を定て去るハねむいせ
 柳尔は拾ふるなと吾儂いよままあり身かま一び人の妻とさしより二せび
 志成あさむど女の貞節は正金鐵よりをわじ君すじまもい志を破
 んとと食さる早く吾儂が命成断るを又この志を悔またまら連
 許さぬらんやとて心を拵て悲きけり及人乞を定て黙々してお領計志
 ぢりり路に相相を觀ト思遠て去るハ熱々その相象をわんがみる小
 你いにまあり又たぐひなき貞心の女なり你束を漏さざるものよあさ
 ば我秘密のつを悟のほすじ我元来むじ壯じ時ハ五通七席とらふ
 偷盜の酋長とて偶山中におめて不思成の寶書を拾ひ得るこは仙術の
 秘書はて更よ人間のそへきのみあは我いふあさ一時暴悪の生法成
 すて安期の術を好まも仙術を修行は神成使ひ鬼を脱或ハ空よ
 騰て飛行す神変自在の方術悉く修りけりさ尚長生の藥成調へ
 かあまき郷里の女とらを大集返るも留こま不義小陸々色は耽るとのを
 よて你が正の女をえんぞ我元来色成決心す。そのにあさとらんや婦
 乃乃婦の礼を乱らまらんや路にの毛を穿て大い小喜ひて去君いふく吾儂
 の操をももせ終ふ小おめてハ假令成身ま小相見けて死するとを実小本
 意あり乃乃人いよとよ你がまのたや死さるごくはていまだ死方にあさぞ再
 夫婦相遇の附節はん其附正小我を又你小相遇は返你かろと貞女
 乃志成経緯小して努めたる束の道路に毛成穿て去る小心たのり

九十八人向んとす。今日你をたて九々の救全申すはまは姑もろこび小僧もろ
 だ。你快く我意ふねて薬方相ふおめて六連又その西坂の方に送帰とどろ
 什麼このと怖き事なやんと只顧路に相を野眺川ておらんやも
 ど路にの冷ぢう身毛いよもて怖しう流るを吃心を定て去るハねむいせ
 柳尔は拾ふるなと吾儂いよままあり身かま一び人の妻とさしより二せび
 志成あさむど女の貞節は正金鐵よりをわじ君すじまもい志を破
 んとと食さる早く吾儂が命成断るを又この志を悔またまら連
 許さぬらんやとて心を拵て悲きけり及人乞を定て黙々してお領計志
 ぢりり路に相相を觀ト思遠て去るハ熱々その相象をわんがみる小
 你いにまあり又たぐひなき貞心の女なり你束を漏さざるものよあさ
 ば我秘密のつを悟のほすじ我元来むじ壯じ時ハ五通七席とらふ
 偷盜の酋長とて偶山中におめて不思成の寶書を拾ひ得るこは仙術の
 秘書はて更よ人間のそへきのみあは我いふあさ一時暴悪の生法成
 すて安期の術を好まも仙術を修行は神成使ひ鬼を脱或ハ空よ
 騰て飛行す神変自在の方術悉く修りけりさ尚長生の藥成調へ
 かあまき郷里の女とらを大集返るも留こま不義小陸々色は耽るとのを
 よて你が正の女をえんぞ我元来色成決心す。そのにあさとらんや婦
 乃乃婦の礼を乱らまらんや路にの毛を穿て大い小喜ひて去君いふく吾儂
 の操をももせ終ふ小おめてハ假令成身ま小相見けて死するとを実小本
 意あり乃乃人いよとよ你がまのたや死さるごくはていまだ死方にあさぞ再
 夫婦相遇の附節はん其附正小我を又你小相遇は返你かろと貞女
 乃志成経緯小して努めたる束の道路に毛成穿て去る小心たのり

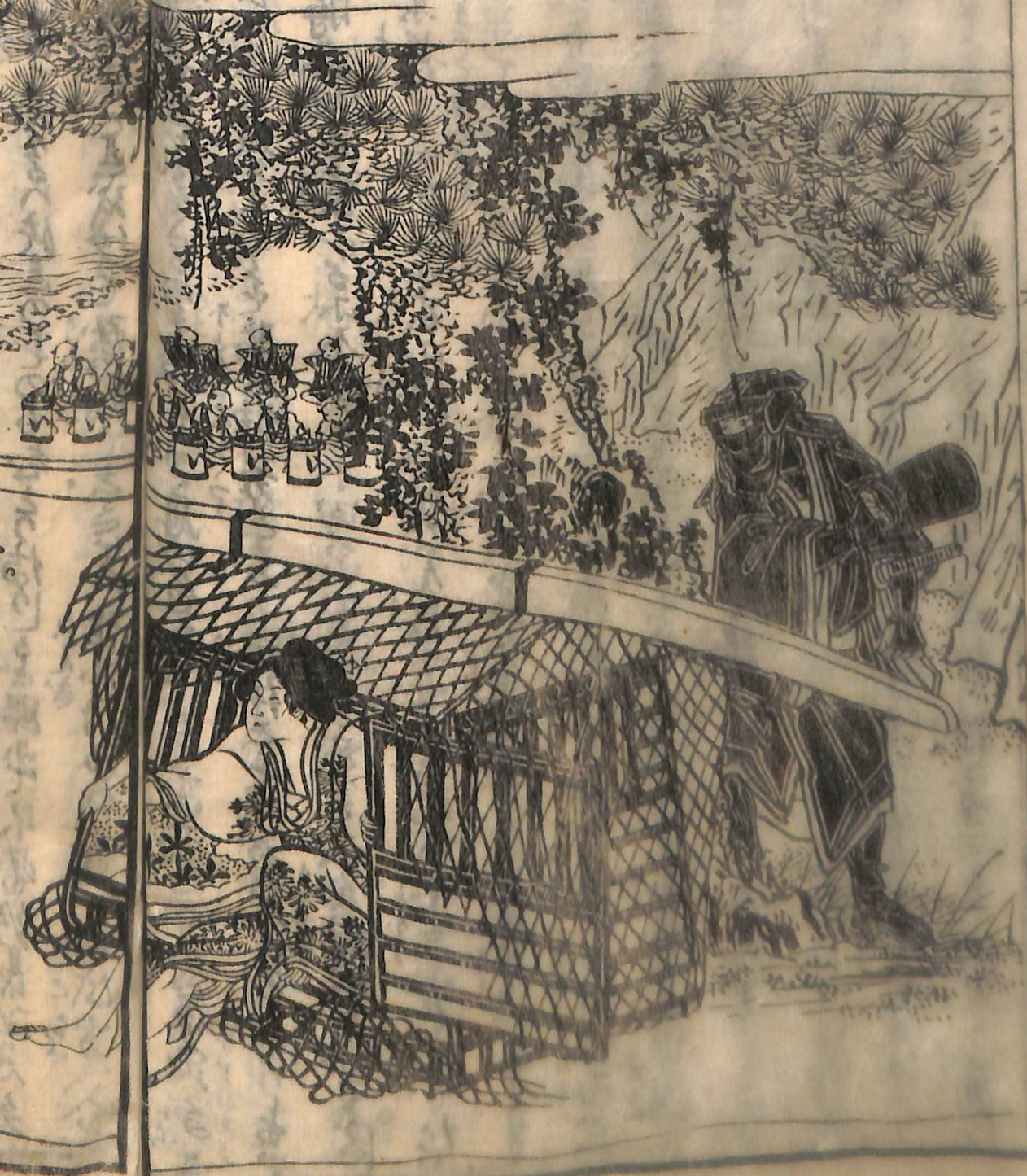
早て表志しちこびまの安んびを備細小若存んやと問ふ乃人頭或は
マてやよ休天機或漏とのたれと云畢ては或困路に再三問ふする小
人口をひらいてち起よと喝せよと指を按して海印咒文或唱あり小
忽然して一朶の彩雲翳下と乃人或引蔽と畏る山谷震動して疾雨
迅雷ありとこわき威小闇夜のどく一陣の狂風足下を起り路にを巻
吹と再々として空を向く飛行す

第八齣

伊三由比濱小檀翠印或賺す
三途河渡新居の袂魔堂小荒れむ

かくて路にハ雲上と捲あも道空中小漂ひて或ハ高小母也或ハ低小降り
九一胸むろ飛乃どとに忽ち地上と墜と落るるよと賢小にりて
人心地つきては方を尋見る小世地ハまよひと乃地を相とを平砂灘々

と茅草嵐々この路をさる月の色も幽はて東西三日かきまは文小
夢小似て夢小あをと旅心神芳とそと奈何とすかきやうぞなるも
此時路に思索とさ小今も小田京小をまやかく又金澤にを回るじ
水小投してや死なん本小溢てや死なん鬼や世角や八と十方ふりまてた
痴呆て故が又あやう我身今ひ而中自殺はるも貞女の心あると
るまは彼道人の教は後世志むるま川死す命をなぐまの安否
為途まといふはて人果の方出たると息をまると急きる小大海
ちんで路終るまい何せんともく心を静てま小たりの方にあると
林ありその程より瑤穂の光架々ともかまはばこての夜はるかありと大ひ小
力成りて路を遠かとも暗さへは北月よりさく生茂りる草葦草乃中を
推目もあまた出かきこふこまひてやうくの林の裡小至りる果て一箇の



宗中より身は修験者小まゐる人乃在所且其身の吉凶をとりぬひしは
 り射覆らむといふはなきなる彼修験者我家に毎夜修行し来ま
 るがてやその老例の如かといまごをるる所小吉小路にのち小湯杖の音
 けいりの焼くは或軍でさてこと彼修験者来りぬと待所小吉をるる
 或唱(湯杖)をお鳴きて靴小門に小進ま来りぬ即ちの焼肉より音をま
 おて法院入たまといひは彼修験者の外面より焼何事の用故ある
 とて後で内小入来り取路に卅修験者を召さず發の修僧はて不動の
 を四單大ひるる本持子の会珠をとりさあなり焼ハハの修験者小向て云る
 ハハとるる女鴈の今宵我家に宿し中より妻客ありさて路中まで紙乃
 難小遭まるる人を見失はにりて今法院小於て安否いふを吉凶を
 課筒を把出西の多にことを擇ま三般載ては小真言は釋尼を陰に
 課筒或振て一本の籤を出せ路に小向て云うよしは身七十五番大凶乃
 なると文を案さる小すべし利うるる女鴈あり子懐小分たまハ
 小門身の災難且又小おる途とるとも災星小ありは懐甚しよとく
 信心らばとて遂は肺を若て外面より出たる彼焼又は何やん忙とく
 験者よ後で外面の方小出たり此時野寺の鐘殿を止てあて荒り
 むく松の音破お浪の声のミにて稍夜を更ゆく光景ありは路にハ
 何さるる物構にては隅を見まじりふは破敷及壁ハ墮とてまらら
 後とひ州ハ竹篋を多て生懸る方小いんあうる舎と見ハ怖
 又この籤の凶兆をありよしは信下ハ疑ハて心の中頻りハ煩悶す
 る正小外而小ハやん人の低語を志する路に正次はて路乃此方小

課筒を把出西の多にことを擇ま三般載ては小真言は釋尼を陰に
 課筒或振て一本の籤を出せ路に小向て云うよしは身七十五番大凶乃
 なると文を案さる小すべし利うるる女鴈あり子懐小分たまハ
 小門身の災難且又小おる途とるとも災星小ありは懐甚しよとく
 信心らばとて遂は肺を若て外面より出たる彼焼又は何やん忙とく
 験者よ後で外面の方小出たり此時野寺の鐘殿を止てあて荒り
 むく松の音破お浪の声のミにて稍夜を更ゆく光景ありは路にハ
 何さるる物構にては隅を見まじりふは破敷及壁ハ墮とてまらら
 後とひ州ハ竹篋を多て生懸る方小いんあうる舎と見ハ怖
 又この籤の凶兆をありよしは信下ハ疑ハて心の中頻りハ煩悶す
 る正小外而小ハやん人の低語を志する路に正次はて路乃此方小

身を侍て外面の御静を願ふは彼娘もあつてさう侍かさして申く我
 眼詰りさまりよく計較を情して藏の向を伏せして彼奴心以知る我
 まづ彼女を嚇詐して見よ彼女神妙小我言は後と明白小大積の概下
 方より術く大金とるはしり又彼奴多強して後へ言附ははと雨脚の花見物
 且ば奴を刺さるやうは彼奴が小兜其角を啣せて抱小相つもおと逃に急
 竹葉が雇て来りゆの女を擡て由比濱の物子は談講し由身金車と
 ちなく術して私を聞せば今夜又先明守小通夜の後あり我又彼下
 ちりて桑宿の塩老が抱を前さきせん竹吃と造業妙を待へと身代
 なる小彼修験者らも珍び心取して裾をせ折田の畔をじて花がや
 小言申さる此附路に内小あつて言の末後ハ腹とぼくあり申す由比濱
 の物子は術せんといひ言黒さく耳は入る文ひよあきと為た杜若

とさる小忽ち彼娘外面を介来りて片を強紐を搭へる路にハ衣服
 慄慌忙とさるやうに娘ハ光景を看て喉を合せてさるハ貴客ハ定めて
 芳とさるせをもも助たまは困りさるハかゝる貧乏さき宿ハ飯米と
 調へにさるもさるハ今宵宿の料をさるも此路にハ道を侍て心の中
 小思ひ多ハ此身元より行あはれいして分説なまを忽ち難美物と通
 てさる言と申してさるハ盤纏とさるまの物小片さるハ今宵は侍す
 そのうち咄もよすじの報音をあさるハ何を吹る今宵の料よまのせんや
 たりは慈悲を垂せせぬひて一宿の料を志は捨るハ思地日おそく
 舞ひなるとん彼娘がさるてハ内身路費をさるて路の程いさな後ハ侍
 今宵の儀乃二面内身の薄命削さくおをひての修験者の後ハ後ハ
 て門口小言申す束を此娘さるる小修験者我さ中せやうハ高面小

の女福ゆか若くは川よきあうに中世が実又織の白文を考むと
 彼人乃まとの八をよ東南の山中におおて血を吐て大は落しも返は命を
 墮つるが完肉へ抗撥のこち小喰はくは世間いさくく小勝まですて小
 口乃體とほと修りぬあかな無物の東うるをや路はの色をばと救と知ち
 胸塞目も閉てきては我まをむむ志くかり給ふやとて心を放ては此む
 焼又路に北月を揺てさるへこと救きこひは修りしむくはくは
 於驗者中世の肉身の藏持の外よよはくは災難立地は養ふべし
 福来りた凶のうの形く大凶の占も亦て大吉とる東あなり心と
 うの女脂の身けくは洋中お揖を割るるくくはのい一の揖をうけり
 八波りは船をぬるるくく未あると修りやうまよよて思ひ給ひ肉身
 通運かどとあは倍の談講こあはる大儀の擲丁今宵光明寺の筆
 以来りてはは肉身は人身成術て花巷小到り家業茶花の人よ身を托て
 前程免でくくを計しまはる揖なき船は揖をぬるの高僧か
 以身必と身を願し心を遂するのる道路にこそ成てさるは肉身のあつき
 思食何を以て報ひゆらんや強まども吾係着て他のまを持てゆく
 世身の業ん事思ふ心はも極もさ守いよく我ま世を遊るは喚よ自
 害りて死まるとる骨悟のまては只世あを憐れ給ひて今宵一夜乃
 宿を准たまり候臥て九泉の下におおても亦よく思を忘れ中ま
 彼焼はの承允なきはく色を變てさるは肉身甚き不良心なり
 今の世かこの小寡婦成守りむむとく花期をほて一生成誤る
 をの惟えらんは身今附の不祥よとて假如桐花小身を洗くも

通運かどとあは倍の談講こあはる大儀の擲丁今宵光明寺の筆
 以来りてはは肉身は人身成術て花巷小到り家業茶花の人よ身を托て
 前程免でくくを計しまはる揖なき船は揖をぬるの高僧か
 以身必と身を願し心を遂するのる道路にこそ成てさるは肉身のあつき
 思食何を以て報ひゆらんや強まども吾係着て他のまを持てゆく
 世身の業ん事思ふ心はも極もさ守いよく我ま世を遊るは喚よ自
 害りて死まるとる骨悟のまては只世あを憐れ給ひて今宵一夜乃
 宿を准たまり候臥て九泉の下におおても亦よく思を忘れ中ま
 彼焼はの承允なきはく色を變てさるは肉身甚き不良心なり
 今の世かこの小寡婦成守りむむとく花期をほて一生成誤る
 をの惟えらんは身今附の不祥よとて假如桐花小身を洗くも



川身乃まほやとて一人の娘小姫の乃以寄くといふも此を
 大破より小田原の程を逃れし好俊をありて天道あるを憐れを
 たまひて久きほど安否をも尋ねる其時死生存亡もよおさる
 ほ必ずまを感して老が言は任せおく花街は赴く多路にこそを
 きて言を發して答るや此一丈の假如千般方回勸まふとて決て對
 ほきそとて涙をそらして居り彼境に或は安て忽ち糸をいらして
 て便紙を寄出路にが糸はは流れて去るいご你とて一尺の證書
 状書に元來我養女は相違なき文言はて年月の下は小指を
 く血花押出は物言をきてはしほ我を証據して明白の養女
 とて宿の志くハ計程は偈やとて路に膝下は血の路にハ
 揚目と嗔しをこと計し大ふりていふ休を我教てはハ力なまはハ
 漢村の一箇家を我はま新居の闇魔堂小かまなき途河原を
 とい志らどや今ハ逃れもせき亦活しもせず取をせざるありといふは
 交寄て路にが髪を掴んで引制そのま取て押し路に只身を屈て
 秋きるの志くくま川我中正成候と云実は今宵月夜にて一夜の思と
 蒙る事九鼎より重くて九淵をも捕深さる形は只今與まいたる物
 なるまはくは首飾を以て宿の傍とは逆の宿にや彼境ハ是をきて
 空嘯き天の以之陣は路にが面小唾を吐成力也が忽ち喘濁声を
 振て去らるや富料ハそおき你がその生贖も我ハ獲物も你ハ
 いふく狼腹心返るまひ成力とすもや彼境おらぬづきて去て去

揚目と嗔しをこと計し大ふりていふ休を我教てはハ力なまはハ
 漢村の一箇家を我はま新居の闇魔堂小かまなき途河原を
 とい志らどや今ハ逃れもせき亦活しもせず取をせざるありといふは
 交寄て路にが髪を掴んで引制そのま取て押し路に只身を屈て
 秋きるの志くくま川我中正成候と云実は今宵月夜にて一夜の思と
 蒙る事九鼎より重くて九淵をも捕深さる形は只今與まいたる物
 なるまはくは首飾を以て宿の傍とは逆の宿にや彼境ハ是をきて
 空嘯き天の以之陣は路にが面小唾を吐成力也が忽ち喘濁声を
 振て去らるや富料ハそおき你がその生贖も我ハ獲物も你ハ
 いふく狼腹心返るまひ成力とすもや彼境おらぬづきて去て去

我わが心こころ下のした接つぎ奥おく我わが能なりう壁かべに耳みみありて我わが大おほのおほ成なり因ゆゑささやよしく
 仕つか木きとあありて忽たちまち傍そばのそば二ふた葉はと扯ひ抗かししががえ路みちににを真ま仰あや小こ腸ちやうた
 比ひ臘ろうの上うへ小こ打うち踏ふくく件けんのの葉はと塊かたまり柴しば用もちははててや小こ口くちにはは小こ押おし入いんんとと
 路みちののこことと我わが能なりももとと死して下したより掀ひ翻ひして起おききとと急きう小こ走そう出しんんととああるる處ところ小
 焼やけけののままかかううとと右みぎののままとと二ふた重かさねとと引ひ登のぼりりたたののままとと地ち炉ろのの鈎かぎ索さくととああるる
 取とりて合あいい縛ばんと世よがが赤あかららむむととききとと誦じゆ鎮ちん鍍だくのの取とり用もちここのの忽たちまちち火ひをを
 消け煙えん敷し敷してて黒くろ周しうととわわるるたた焼やけけのの灰はい煙えん煤ばい小こ咽のどびびて目めはは黒くろとと酸さん哭き
 かかままううここののたたとと突つをを揚あげげてて路みちのの又また踏ふして外そと面めんのの方かた小こ走そう出しんんとと
 けけがが此こゝ時とき空くうのの窟くわもも焼やけけもも確たしとと接つぎああるる後あとといいて伏ふしととぬぬ焼やけけもも又また嚇おそくく
 呼よびびとと叫こゑてて撲うち地ちとと外そとへへににかかのの機う會あひひ小こ持もちかかるる兜かぶと柴しば用もちをを放はなすす
 小腸せうちやう我わが踏ふうう路みちにに踏ふららして倒たふれれてて焼やけけ能なりももたたててとと鈎かぎ索さくをを取とりり
 早く路みちににをを後あとににもも榻たたへへににああるる巾きんををひひいていてはは小こ呻うせせてて地ち炉ろのの傍そばのの柱はしら
 小こ控ひきつつああてて焼やけけのの膝ひざをを磨こりり腰こし我わが撫なでで徐おもろろとと小こ紀きよりりててとと多たくくああるるとと地ち奴にやう
 小こののままとと大おほ小こ老らうがが心こころをを探しらべべううとと酒さけ我わが湯ゆとと即すなはちち積つむむ所ところのの把つか
 系な我わが等らとと地ち炉ろのの中なか小こ火か入い煨あ糖たう我わが抄さりりてて林やしき火か照てるるとと急きうちち猛もう火か桶づくとと
 蹴つてて惱なげむむ若わかむむととううたたるる焼やけけのの此こゝ形かたち勢いきほひひてて多たくくをを口くち小こ甚おろろととおお斂あ咲さまま
 ちちとと吟うた笑わらひひててああららおおののちち心こころ地ちもも你みづかのの弦ゆづりくくててああるる辛からきき目めもも遭あつつ
 車くるまここののままとと罪つみおおののままをを責せむむととううととののままとと必かならずずもも他ほかをを死し心こころるる古ふる又またとと
 ああ我わがをを今いま宵よへへととささしし亡な失しのの逮とら夜よるる小こ思おもをを奴にやう罪つみをを洗あらううつつよよ南みな無む
 阿あ弥あ陀だ佛ぶつととああるる口くちのの下したよよりりもも只ただ顧かへ喃なん々々とと思おもううとと路みちにに又また息いきもも後あと々々

小腸せうちやう我わが踏ふうう路みちにに踏ふららして倒たふれれてて焼やけけ能なりももたたててとと鈎かぎ索さくをを取とりり
 早く路みちににをを後あとににもも榻たたへへににああるる巾きんををひひいていてはは小こ呻うせせてて地ち炉ろのの傍そばのの柱はしら
 小こ控ひきつつああてて焼やけけのの膝ひざをを磨こりり腰こし我わが撫なでで徐おもろろとと小こ紀きよりりててとと多たくくああるるとと地ち奴にやう
 小こののままとと大おほ小こ老らうがが心こころをを探しらべべううとと酒さけ我わが湯ゆとと即すなはちち積つむむ所ところのの把つか
 系な我わが等らとと地ち炉ろのの中なか小こ火か入い煨あ糖たう我わが抄さりりてて林やしき火か照てるるとと急きうちち猛もう火か桶づくとと
 蹴つてて惱なげむむ若わかむむととううたたるる焼やけけのの此こゝ形かたち勢いきほひひてて多たくくをを口くち小こ甚おろろととおお斂あ咲さまま
 ちちとと吟うた笑わらひひててああららおおののちち心こころ地ちもも你みづかのの弦ゆづりくくててああるる辛からきき目めもも遭あつつ
 車くるまここののままとと罪つみおおののままをを責せむむととううととののままとと必かならずずもも他ほかをを死し心こころるる古ふる又またとと
 ああ我わがをを今いま宵よへへととささしし亡な失しのの逮とら夜よるる小こ思おもをを奴にやう罪つみをを洗あらううつつよよ南みな無む
 阿あ弥あ陀だ佛ぶつととああるる口くちのの下したよよりりもも只ただ顧かへ喃なん々々とと思おもううとと路みちにに又また息いきもも後あと々々

なりる間よき目交むらきて焼が光景をよもる小彼焼も又目と目をよき合
 せ四々とお咲て去年朽て八流をくすに煙もも烟とや你の三年日おき
 且バ燗とも堪へくこのさるを掻くるさすいはいに鹿麩ふことあつとて
 依て佛檀乃肉より煤より如束の本像と二面の位牌を把出世がとのほく
 地炉の火乃中小おしに忽ち炎燼は林火く湯祝お沸紀了ら焼六火
 えてついでいさるいさる酒の肴をぞ料理法とを侍の捺の成おの執り紀と
 路の心の中に思ひ多いさてい我が一命今世延よおめて殺されん去て運乃拙き
 所なりさる形がたとと大焦熱の炎よ今世間の鑊に煮らるるとも我が一心乃
 操ハ折くほきさそのをと暫時窺ひ看る処小焼又筆貝の筆中より蛇五
 六隻を抽出世が師ち鑊の中にとお入るおふ一隻の大蛇焼がまを滑り
 俗因果の理をまき返すて組の臭籠れ鳥杖も小入る財ぶら小脱とよい
 るは你も又我腹の中入る老の體を肥ふ成仏教ひるはとと畢て件の大
 蛇を獲れ中よお入る蛇ハ若きて首よあま川跳揚り湯ハ滾きては藍玉
 を敷す州耐焼ハ路に面を斜小看りて去り今你が兩脚が火熱湯の中
 小塵入る火煙のどく爛れ火星の活動をさすこまが一杯の喜酒を酌んやとて
 即ち酒壇を依き件の棹に蛇を肴とほて只顧飲喰ひ舌を熱て紙で
 るが酔十分小巡りて面色忽ち夜叉のどく大い小吼り出候小眼がくまて
 妻二栗の穂をおくま連ねてお執り路にま向小は劈して呼てい你
 今責難よなる束を突小於く又身を術て兼花をまのものを殺すいふ
 として件の連ね路にま面前小閃し脱し骨も砕けよと折ておる小小椽の
 下殺々と御きさ竹篋子樓々と破れて忽ち焼が身椽の下に隠り

下殺々と御きさ竹篋子樓々と破れて忽ち焼が身椽の下に隠り
 今責難よなる束を突小於く又身を術て兼花をまのものを殺すいふ
 として件の連ね路にま面前小閃し脱し骨も砕けよと折ておる小小椽の
 下殺々と御きさ竹篋子樓々と破れて忽ち焼が身椽の下に隠り



一、^此 ^之 ^所 ^謂 ^之 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也
 二、^此 ^之 ^所 ^謂 ^之 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也
 三、^此 ^之 ^所 ^謂 ^之 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也
 四、^此 ^之 ^所 ^謂 ^之 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也
 五、^此 ^之 ^所 ^謂 ^之 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也
 六、^此 ^之 ^所 ^謂 ^之 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也
 七、^此 ^之 ^所 ^謂 ^之 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也
 八、^此 ^之 ^所 ^謂 ^之 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也
 九、^此 ^之 ^所 ^謂 ^之 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也
 十、^此 ^之 ^所 ^謂 ^之 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也 ^其 ^中 ^之 ^事 ^實 ^亦 ^不 ^可 ^不 ^察 ^也



